

令和 5 年 5 月 19 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00155

研究課題名(和文) 思想としてのファッション 20世紀後半の芸術における身体表象との関係から

研究課題名(英文) Fashion as a Concept Concerning the Representation of the Body in the Late 20th-Century Art

研究代表者

平芳 裕子(Hirayoshi, Hiroko)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：50362752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：芸術の伝統的なヒエラルキーではファッションは下位に位置付けられてきた。しかし20世紀後半の芸術文化において、ファッションは芸術作品としての評価や文化的意義を獲得していく。本研究では、日本におけるその思想的背景を明らかにすることを試みた。高度経済成長期におけるファッションデザインの発展、バブル経済期におけるファッションデザイナーの地位の向上、ミュージアムにおける衣服の収集とファッション展の開催を、地理学者・田中薫の衣服収集と民俗衣服博物館構想、哲学者・鷲田清一の現象学的身体論と作品批評から読み解き、現代に向けてファッションが価値づけられていく過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

芸術の伝統においてファッションは下位に位置付けられてきたが、20世紀後半からのファッション産業の発展とともにその状況は変化してきた。ファッションが単なる産業ではなく、芸術との関わりを密接に保ちながら、芸術作品としての価値を獲得し、現代の芸術文化や産業社会に多大な影響力をもつに至った過程を、芸術史や思想史の同時代的文脈を踏まえて考察した。ファッションは従来軽薄なものとして学術分野では軽視される傾向にあったが、そのこと自体を問題として提起し、人文学的な研究主題かつ現代社会へ切り込む対象を考察するための枠組みを提示したことに、本研究の学術的かつ社会的な意義が見出されるといえる。

研究成果の概要(英文)：Fashion has been positioned lower in the traditional hierarchy of the arts. However, in the art culture of the late 20th century, Fashion gained recognition and cultural significance as a work of art. In this study, I attempted to clarify the ideological background of this trend in Japan. In particular, through geographer Kaoru Tanaka's collection of clothing and his conception of a folk clothing museum, and philosopher Seiichi Washida's phenomenological theory of the body and criticism of his works, I have examined the development of fashion design during the period of rapid economic growth, the rise of fashion designers' status during the bubble economy, the collection of clothing and fashion exhibitions in museums and the process of valorization of fashion in contemporary society.

研究分野：表象文化論

キーワード：ファッション ファッションデザイン アート 現代思想 民族衣装 ミュージアム

1. 研究開始当初の背景

近年、アートとファッションの融合がさかんに語られている。芸術家とファッションデザイナーの共同作業は西洋美術においては20世紀初めから行われてきたが、その傾向は1980年代以降に顕著となった。現代美術の分野において古典的かつ理想的身体像ではなく「朽ちる身体」「おぞましい身体」が注目される一方、日本のファッションデザインが世界的な評価を獲得し、美術館において衣服を用いた芸術作品やファッションデザイナーによる衣服が頻繁に展示されるようになった。そして、芸術的要素と産業的要素を併せ持つファッションの創造性が、美術展と同様に「ファッション展」として美術館制度のなかに位置付けられ、「ファッション」はアートの一つの分野として確立したかに見える。それは事実としても、ではなぜアートは「ファッション」を取り込むようになったのか、なぜミュージアムはファッション展を必要とするのか。この問題を、芸術思想および芸術史の文脈において考察する必要があると思われた。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀後半の日本の芸術動向と思想状況における身体観および身体表象の変容の軌跡を辿ることによって、20世紀アートにおけるファッションの価値化、ミュージアムにおけるファッション展興隆の歴史的な文脈を明らかにするものである。

とりわけ1960年代における西洋ファッションの流入の時代における衣装研究や展示の試み、1970年代におけるファッションの大衆化の時代におけるパフォーマンスな身体像、1980年代の日本のファッションデザインの勃興の時代におけるファッション評論の言説化の流れを明らかにする。

そして20世紀後半における日本の芸術動向や思想状況において、造形芸術・視覚芸術としての衣服のデザインが、思想としてのファッションを生成させ、芸術の文脈にファッションを位置付けることによって、同時代のファッションデザインやファッションに与えた影響を明らかにする。

3. 研究の方法

研究方法としては、1)文献資料調査、2)アーカイヴ調査、3)作品実見調査を基本として行った。

1)の文献資料調査としては、20世紀後半の芸術動向に関する記録・記事を美術雑誌やファッション雑誌を対象として調査・収集した。美術雑誌は『みづゑ』、『遊』、『芸術新潮』、『美術手帖』などを主たる対象とし、身体やパフォーマンス、ファッションに関する記事を調査・収集した。また、ファッション雑誌は『装苑』、『ハイファッション』、『マリクレール』などを主たる対象とし、経年的な内容調査を行った。

2)のアーカイヴ資料については、コロナ禍による制限もあったために、デジタル化されている関連文献資料を中心に、国立国会図書館所蔵資料を中心に行った。

3)の芸術作品・服飾作品の実見調査については、神戸ファッション美術館、島根県立石見美術館、文化学園服飾博物館、国立新美術館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、豊田市美術館、三菱一号館美術館、京都服飾文化研究財団などを中心に行った。

研究対象とする資料の年代については、後述するように、当初計画においては1960年代から80年代までを予定していたが、必要に応じて時代を広げ、1940年代から20世紀末までを対象とした。

4. 研究成果

当初の研究計画は3年間を予定していたが、初年度末からのコロナ感染拡大により、研究計画の見直しの必要に迫られることとなった。文献資料の収集、作品の実見調査など、研究の核心部分に関わる調査に限られた範囲でしか実施することができず、研究内容についても実行可能性に基づいて再検討せざるを得なかった。制限のあるなかでも研究を遂行するために、対象とする時代をやや変更し、20世紀の期間のうち時代を遡り、戦前から1960年代、1980年代から1990年代の二つの特異な時代に注目し、さらにこの間に活躍した理論家二人に焦点を当てて研究を遂行することで、一定の成果を得ることが可能となった。

まず、戦前から1960年代の西洋ファッションの移入時においては、田中薫という地理学者の衣服研究を取り上げることで、芸術的な動向と思想的な状況のなかで、ファッションに学術的・社会的・文化的意義を与えられていく過程を明らかにした。田中薫は、地理学の探究から世界の民俗衣服に関心をもつようになり、戦中・戦後の社会において、日本固有の衣服の位置付けについての考察を行った。そして民俗衣服の収集と保存を通じて、民族衣装の目録化を試み、学問としての衣服学の確立を目指し、また民俗衣服博物館の設立を構想した。民族衣装としての衣服が収集され、日本的衣服の内実が検討され、衣服を研究するための学問のありかたが思考されることによって、ファッションが学術的な研究対象として、あるい

は審美的な鑑賞対象としての価値を獲得していくさまを明らかにした。

そして、1980年代から90年代におけるファッションデザインの発展の時代については、哲学者・鷺田清一のファッション論に注目することで、高度資本主義社会において日本のファッションデザインが世界的な評価を確立し、ファッションの文化的意義、芸術的価値が認められていく過程を辿った。特に鷺田による現象学的身体論がファッションデザイナーの評価に与えた影響を明らかにし、ファッション批評自体の活性化がもたらされた経緯を辿った。またポストモダン思想の流行とともに、記号消費としてのファッションが注目され、アカデミズムにおいても知的遊戯として持て囃されたファッションが、学際的研究対象としての地位を獲得し、ファッション学として発展していく道筋を明らかにした。鷺田がリードしたこのファッション学は、今日のファッションスタディーズへと連なる、思想としてのファッションの基盤を作り出すことになった。

上記の研究において明らかとなった思想的状況をふまえ、20世紀のアートとファッションをとりまく芸術動向における身体観や身体表象の変容について考察を行った。西洋の伝統的な衣服制作においては、体型に即した衣服、すなわちフィット感が重視されてきたが、20世紀後半の日本の思想的状況、日本のファッションデザイナーの活躍を通して、西洋のファッション界においても、身体をかたどるための衣服の造形ではなく、衣服と身体の関係を見直し、より身体的な感覚、皮膚による感覚を目覚めさせる技術や素材が注目されるようになった。この傾向を、20世紀を特徴づけるスタイルを考案したファッションデザイナーたち、たとえばガブリエル・シャネル、マドレーヌ・ヴィオネ、クリスチャン・ディオール、三宅一生、川久保玲などを中心に検討した。20世紀のファッションにおける衣服と身体の関係の変容、素材と技術の変化を考察し、ファッションデザインがアートの文脈において評価され、ミュージアムで作品として展示される経緯を考察した。

以上、20世紀後半の芸術文化における思想的状況の一端を踏まえ、高度経済成長期におけるファッションデザインの発展、バブル経済期におけるファッションデザイナーの地位の向上、ミュージアムにおける衣服収集とファッション展の開催、デザインにおける身体感覚、皮膚観感覚の重視を経て、ファッションがアートの文脈に接合し、文化的・社会的意義が高められていく状況を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平芳裕子	4. 巻 68
2. 論文標題 田中薫と民俗衣服ー地理学から衣服学へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 服飾美学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平芳裕子	4. 巻 10月号
2. 論文標題 シャネルはなぜ女性解放の象徴となったのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 93-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平芳裕子
2. 発表標題 田中薫と民俗衣服ー地理学から衣服学へ
3. 学会等名 服飾美学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 平芳裕子ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 292
3. 書名 クリティカル・ワード ファッションスタディーズ 私と社会と衣服の関係	

1. 著者名 美学会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 735
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 上羽陽子・山崎明子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 312
3. 書名 現代手芸考	

1. 著者名 平芳裕子（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 神戸市	5. 総ページ数 1162
3. 書名 新修神戸市史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------